

汀の池（寂光院）

寂光院の本堂の前にある池と桜は『平家物語』ゆかりのものとされています。

『平家物語』は、平安時代の終わり頃に活躍した平家の一族が、政治的実権を握ってから滅んでゆくまでを描いた物語で、実際の歴史的事件をもとにしています。平氏の中心人物はほとんどが命を落としますが、建礼門院という女性が生き残りしました。彼女は天皇の母として高貴な地位にありましたが、地獄のような戦場を経験し、家族を一度に失ったのです。そして彼女は尼となり、ここ寂光院で余生を送りました。彼女は質素な暮らしを送りながら、平家の一族および、6歳で亡くなった息子(安徳天皇)の冥福を祈り続けていたといわれています。

『平家物語』の最後のクライマックスは、後白河上皇が彼女のもとを訪ねた場面です。彼は建礼門院の養父でした。後白河上皇は、かつて華やかだった彼女の、変わり果てた境遇に胸を打たれます。彼女の暮らす寂光院の庭には草がしげり、藤、山吹などの晩春の花が咲いていました。そして池の周りには、普通の桜よりも遅い桜が散っていました。

そんな情景をみて後白河法皇が詠んだ歌が、次の和歌です。「池水に汀の桜散り敷きて波の花こそ盛なりけれ」

（池の水面に水際の桜の花びらが散って一面浮かんでいて、（木の桜は散ってしまったが）波の上の花は今こそが満開であるよ）。

この和歌に詠まれた、散っていく桜の花は、まるで「すべてのものは滅んでゆく」という『平家物語』のテーマを示しているようです。しかしこの和歌は、その悲しい景色の中に美しさを見出しています。その精神は、滅びゆく平家の人々の姿を、愛情深く見つめて描き出した『平家物語』とも通うでしょう。

平家が滅びてから800年以上がたった現代も、この池のほとりには桜が咲いています。人々は今もこの桜を眺めて昔を偲んでいます。